

英語学

長谷川 明香

2021年、英語学、表現学との関連で最も注目すべき書籍は平沢慎也著『実例が語る前置詞』(くろしお出版)であろう。認知言語学が掲げる使用基盤モデルを徹底的に実践する氏の研究姿勢は、前作『前置詞byの意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ』においてすでに強く打ち出されているが、本書は研究書兼学習書という形でそれを一層推し進めている。具体例を材料に理論的主張をなすというよりは、理論を背景としつつも、出会った生きた英語を母語話者のように使うために必要な知識とは何かを追究し、その実体の一端をきめ細かく明快に教えてくれる。例えば、awayには“… were cheerfully chatting away”「…は陽気にべちゃくちゃ喋っていた」のような、「離れて」という意の基本的用法とは一見無関係な例も存在する。基本的用法との繋がりも説明されるが、その一方で、それだけでは決して母語話者と同じようには英語を使えず、非常に細密な知識([無駄話[æ]動詞1語+away)で「外界とは切り離されたようにして、自分の世界に入り込み、無駄話に没頭する」、chatter away, chat awayは特に多い…等々)が不可欠であるということが示されている。

北村一真著『英語の読み方：ニュース、SNSから小説まで』(2021、中公新書)は、真の意味での英語を読む力がいかに英語習得に重要であるかを説いた良書である。英語の文章構成や各文のポイントの丁寧な解説、インターネットを活用した学習法の紹介等、コンパクトながら充実した内容、情報量となっている。

以下の2冊は英語学者によるものではないが、英語学および日英語対照研究の観点から学ぶべきところが大きく有益である。

長部三郎著『伝わる英語表現法』(2001、岩波新書)が2021年夏に復刊され話題を呼んだ。本書で扱われる「世界情勢」と“what's going on in the world”や「当社の特徴は…」と“What makes us different is …”等に見られる日英語の差異は、池上嘉彦氏が好まれる言い回しに関する研究の中で主張している「日本語はコト(動詞)的、英語はモノ(名詞)的である」という傾向性と対立するものであり、理論的にも興味深い。

柴田元幸編・訳・註の「英文精読教室」シリーズ(既刊4巻、全6巻の予定、2021年～、研究社)は、英語小説の原文・日本語訳を見開きにまとめたもので、精読に値する英語とそれに対応する自然な日本語の宝庫と言える。丁寧に註も付されており、語句の意味やニュアンス、作品の味わいにかかわるものまで幅広い。例えば“Who's out in the kitchen?”(第3巻)はカウンターで食事の客が発した言葉である。話し手のいる場を中心としてそこから外れていることをoutで、その次に具体的な場所をin the kitchenで指定するという構造で、平沢氏の上掲書第1章「位置の2段階指定」の好例であると言える。さらに「キッチンに誰がいる？」という柴田氏の訳は日本語において英語ほど2段階指定が好まれないという平沢氏の考察と見事に呼応している。

以上のように2021年は、好まれる言い回しに関する英語研究の豊かな成果が日本の一般読者の手にとりやすい形で世に出た年であったと言えるだろう。(東京造形大学)